

縄文時代早期清水柳E類土器に関する研究

下 島 健 弘

今回の修士論文では縄文時代早期の条痕文期において静岡県東部から神奈川県に分布し、絡条体圧痕文を主文様とする清水柳E類と呼ばれている土器について研究をおこなった。研究内容は主に土器による型式編年についてであるが、関東において清水柳E類に伴うと考えられている子母口式、野島式についてその編年的指標を提示し、清水柳E類について類似性に基づき並行関係についてせまっていた。

まず第1章にて研究史を概観し、なぜ清水柳E類というような類別しかされずに現在に至っているのかということや、子母口式に伴うという考えと野島式に伴うという考えの二つの考えが成立したのかということについて概観した。また研究が進んだ現在においてどのようなことが問題視されているのかということについてまとめた。

第2章では、清水柳E類についてこれから研究していく基準となる分類作業をおこなった。分類は文様要素別におこなった。清水柳E類に施文される文様要素は絡条体圧痕文、隆帯、沈線、凹線があり絡条体圧跡文はすべてに施されている。隆帯と沈線は組み合わせられて施文しているものもあり類別としては違うグループにするべきと考えた。類別としてはⅠ類に絡条体圧痕文のみを施すもの、Ⅱ類は絡条体圧痕文と隆帯を組み合わせで施文するもの、Ⅲ類は絡条体圧痕文と沈線を組み合わせで施文するもの、Ⅳ類は絡条体圧痕文と隆帯と沈線を組み合わせで施文するもの、Ⅴ類は絡条体圧痕文と凹線を組み合わせで施文するものとした。このように大別した後に類別ごとに、施

文位置、施文方向により細別をおこなった。

I類では横位に絡条体圧痕文を施文するものをaとし、左下から右上にもしくは左下から右上へ斜位に絡条体圧痕文を施文するものをb、二方向や乱方向に絡条体圧痕文を施文するものをc、原体を半置半転しながら絡条体圧痕文を施す土器をdとした。II類では横位の隆帯と絡条体圧痕文のみで施文したものをa、bに横位の隆帯に加えて縦位の隆帯を組み合わせたものと絡条体圧痕文を施したものをc、dとし、さらに隆帯以上に絡条体圧痕文が施されるものと隆帯以下に絡条体圧痕文が施されるものについて細分をおこないa、b、c、dの4細分をおこなった。III類は絡条体圧痕文に加えて沈線を施す土器群であるが、ほとんどの土器が文様帯として区画するための横位の沈線を引き、文様帯には格子目状や鋸歯状のモチーフをもった沈線により充填されている。この類は一様性が高く分類し難いので細分はおこなわなかった。IV類はII類と同様に縦位の隆帯があるかないかにより細分をおこなった。この縦位の区画のあるなしにより口縁部文様帯の広さにかかわってくるようである。V類は出土量が少なく細分の可能性について断言しにくいいため細分をおこなわなかった。

このように分類、細分をおこない清水柳E類の範疇内でどのように変化しているのかということについて絡条体圧痕文以外の文様を施文するかしないかにてひとグループとし、文様帯の区画の広さや絡条体圧痕文を施文する位置関係、粗製の様相の強さによりII類a、c、d、III類、IV類a、V類とII類b、IV類bの二つのグループに分けることが可能であるため、合計三つのグループに分類が可能であると考え。それではどのようにこの三つのグループが清水柳E類の範囲の中で存在しているのであろう。関東系の土器群からのアプローチにより調べていくこととする。

第3章では子母口式と野島式という関東系の土器群について、その型式自体の観察をしながら清水柳E類の存在について考察を加えていくことにする。

まずは子母口式であるが、そもそも清水柳E類が子母口式並行の土器群であるということは絡条体圧痕文という文様要素の共通ということからきているようである。そこで絡条体圧痕文を中心に考察していく。まず清水柳E類は前述したようにすべての土器が絡条体圧痕文を施文している。しかし子母口式は絡条体圧痕文以外に隆帯、沈線、刺突、細隆起線、貝殻などにより施文しているものもある。子母口式の前型式において隆帯、沈線、刺突、細隆起線、貝殻などによる施文がみられるため系統的に繋がってきた様相であろうと考えられる。それでは子母口式はどこから絡条体圧痕文という要素を持ち込んできたのであろうか。その出自については東北南部に分布する常世式からというのが有力なようである。それでは清水柳E類の絡条体圧痕文も同様のルートを辿ってきたものであるのだろうか。

筆者は絡条体圧痕文を観察するうちに子母口式と清水柳E類の絡条体圧痕文は施文の方法に差異があるのではと考えた。子母口式は器面に対して平行に押付けるのであるが、清水柳E類は絡条体圧痕文の粒の右側に粘土の盛り上がりができているため、原体の左端をまず器面に付け、原体を器面に対して転がすようにして施文しているのである。このような施文方法の差により、清水柳E類と子母口式は異なる系統のもとに発生した土器群ではないかと考えられる。

次に野島式であるが、子母口式が清水柳E類と伴って出土する事例は少ないのに対して野島式は静岡県東部にて多くが清水柳E類と共伴することが知られている。そこで焼場遺跡A地点、B地点、徳倉B遺跡、小池遺跡の両土器群の出土位置によって差がみられないか調べてみた。しかし出土位置は、各遺跡の分布域には多少の違いがみられるが、概しては同じように出土しているようであり差はみられなかった。次に清水柳E類と伴に出土している野島式土器について観察を試みた。焼場遺跡A地点では清水柳E類が出土していないのに対しB地点では出土しているので単純に引き算してその存在域について考えてみたわけである。しかし徳倉B遺跡、小池遺跡の様相をみてみ

るとそう単純に結果は出ないようである。そこでまず野島式について型式内における変遷を作ってみることにした。清水柳E類とともに出土している野島式は隆帯、沈線、凹線などにより施文されているが筆者は施文工具に注目して分類をおこない3段階に変遷させることが可能であると考えるにいった。なぜなら沈線に関していえば、筒状工具を用いたものや半截竹管状工具の外側を用いたものもあり工具により太さなどに視覚的な違いがみられたためである。

まず1段階は隆帯（隆起線）のみで施文するものや隆帯と沈線を組み合わせて施文するもの。続く2段階では各種工具を用いて沈線のみにより施文をおこなうもの。3段階では隆帯（細隆起線）と沈線により施文するものということである。

それではこの野島式のストーリーのうち清水柳E類はどの部分に並行するのか。また子母口式とは異なるとした起源はどこにあるのだろうか。第4章にて清水柳E類の編年的位置付けをおこなうことにする。

清水柳E類の発生段階の様相は静岡県富士宮市に所在する黒田向林遺跡にて観察することができる。黒田向林遺跡では高山寺式、高山寺式に伴う関東系の土器である田戸上層式、田戸上層式終末もしくは子母口式初頭といわれる粗製の要素の強い土器群、清水柳E類、そして高山寺式に伴うと考えられている撚り糸が出土している。筆者はこの撚り糸に関して清水柳E類の起源を求めた。撚り糸を高山寺式に伴うと考えられる格子目を描いた撚り糸と横位に無文帯を持つように縦位や横位に密接に施文される粗製の要素の強い土器群を分離し、後者を田戸上層式終末・子母口式初頭に位置付けようと考えたわけである。またこの土器群には半置半転する土器群もありI類dに関連を持つと考えられる。そこから清水柳E類が発生したのではないだろうか。また黒田向林遺跡ではI類の土器のみが出土しているため発生時にはI類が主になっていたようである。

この段階について最近では判ノ木山西遺跡例や相木式の編年的位置付けに

ついて問題にされているようである。このことについては黒田向林遺跡と同じく富士宮市所在の石敷遺跡にてその様相が探れるようである。筆者は高山寺式に伴う撚り糸から密接な撚り糸への変化を述べたが、同時に判ノ木山西遺跡例のように巨大化した格子目を描くモチーフへとも変化していったのではないかと考えている。また相木式は全く別系統で押型文期末として扱えるのではないだろうか。

清水柳E類の終末期の様相としては文様要素の共通性や野島式3段階として設定した細隆起線がみられないことから2段階まで清水柳E類は伴うのではないだろうかと考えた。その様相としては野島式の影響を受けⅡ類a、c、d、Ⅳ類aのような隆帯が発生し、野島式に伴うようにⅢ類の沈線やⅤ類の凹線が発生したと考えられる。また野島式にて屈曲が発生しはじめる2段階の頃に粗製のⅠ類の土器群からⅡ類bやⅣ類bのような太い隆帯をもち屈曲のきっかけにしたような土器群が発生したのではないかと考えている。

このように清水柳E類の編年的位置付けについて検討を加えてきたわけであるが、第5章の結語にてどうやら清水柳E類は子母口式から野島式の2段階まで並行するようで、Ⅰ類からⅡ類、Ⅲ類、Ⅳ類、Ⅴ類が野島式の影響を多く受けながら発生したようである。